2　前橋公園の花見にみる歴史的風致

関東の華　生糸のまち　食文化

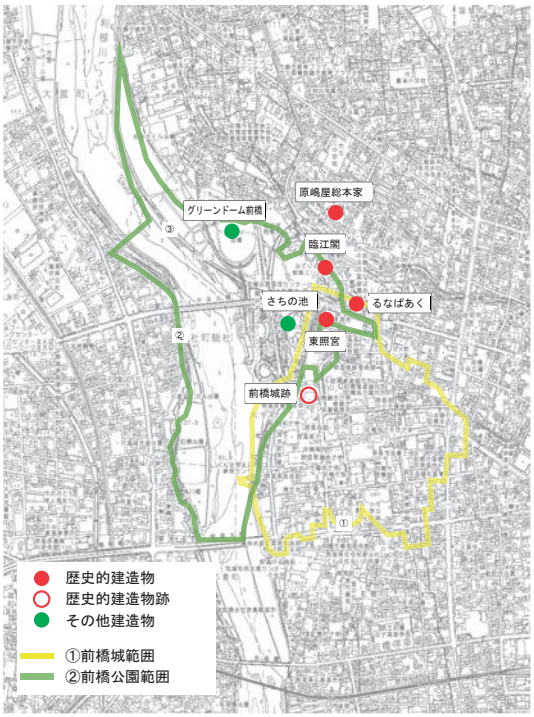
（1）古くからの行楽地＝前橋公園

前橋公園は明治時代にできた市内初の公園で、眼下に利根川が流れ、遠景に榛名・妙義の山並みを望む絶景から、萩原朔太郎や室生犀星などの多くの文化人に愛されてきた。また、古くから市内有数の行楽地として多くの人々に利用される一方、園の一部はかつての城内であったため、土塁や堀などの遺構が散見され、歴史情緒が色濃く感じられる場所でもある。

平成 20 年（2008）に開催された「全国都市緑化ぐんまフェア」は、前橋公園がメイン会場の一つであった。それまで、園内には臨江閣やるなぱあく（中央児童遊園）のほか、旧前橋競輪場（バンク）や旧県立武道館が近い場所にひしめき合っていたが、緑化フェアの開催を契機に大規模な再整備が行われ、広大な広場や日本庭園を備える現在の姿となった。

平成 27 年（2015）にＮＨＫ大河ドラマ「花燃ゆ」が放映され、群馬県庁昭和庁舎に大河ドラマ館が設置されると、ドラマの主要人物で初代群馬県令を務めた楫取素彦ゆかりの地を巡る、昭和庁舎から臨江閣までのガイドツアーが人気を博し、来館者の多くがこれに参加した。ツアー参加者からは、前橋公園の景色や臨江閣の風格を評価する声が多く寄せられ、本市屈指の都市観光資源であることが改めて明らかとなった。

花見の名所として知られる前橋公園



（2）関連する建造物

【前橋公園の花見を構成する建造物】

①前橋公園（楽歩堂前橋公園）

前橋公園は、明治 38 年（1905）の日露戦争の記念で建設された近代都市公園である。もともとは師範学校の運動場として利用され、東照宮祠畔公園としても親しまれていた場所であるが、臨江閣の本市への移管に際し公園として組み入れられ、明治 43 年（1910）には、「一府十四県連合共進会」[5]の祝宴場としても利用された。園の一部は、前橋城内の柳原口内や空堀にあたり、かつての土塁や堀が園内の散策路や園周水路として利用されている。

---

[5] 共進会は現在で言う国内博覧会のこと。明治 43 年（1910）の共進会は群馬県主催で、東京・神奈川・埼玉・千葉・茨城・栃木・群馬・新潟・長野・山梨・福島・宮城・山形・岩手・青森が参加したことから、「一府十四県連合共進会」と呼ばれた。

また、園の西側は利根川に面しており、治水工事で整備された土木工作物が今も残る。中でも、明治30年代に整備された「岩神の石堤」は、霞堤（開口部を設けた不連続な堤防）の機能を有しており、都市部で大規模に残っている点が評価され、土木学会関東支部から「選奨土木遺産」に認定されている。

昭和９年（1934）（推定）の前橋公園
出典：前橋市鳥瞰図（国際日本文化研究センター）

古くから桜の名所として知られるが、明治25年（1892）に初代市長に就任した下村善太郎が、「市民の憩いの地になるように」と桜を植樹し、戦後の昭和26年（1951）には公園を含む周辺一帯にも桜が植樹されたため、現在では市内有数の花見スポットとなっている。

園内には、明治を象徴する臨江閣、昭和レトロを感じさせるるなぱあく（中央児童遊園）、平成前橋を象徴する屋内型競輪場（グリーンドーム前橋）が建ち並び、前橋近代化の歩みを一望することができる。なお、園の南にある「さちの池」は、昭和34年（1959）に上皇陛下（当時は皇太子殿下）の成婚を記念して造成されたもので、池の外周が群馬県の県域を表わす「鶴舞う形」になっている。また、池の中央には、在日朝鮮人の母国帰還に尽力した当時の市長への感謝として、昭和34年（1959）に帰還者から寄贈された「親子三羽鶴」と呼ばれる噴水がある。ブロンズ製の親子鶴は、朝鮮出身の父、日本人の母とその子供が祖国へ帰る姿を表している。

さちの池の親子三羽鶴

②原嶋屋総本家の蒸籠塚

原嶋屋は、群馬県民の郷土食として知られる「焼きまんじゅう」の老舗で、原嶋屋の伝承によれば、安政4年（1857）に初代・原嶋類蔵が創業したとされる。創業当初は店頭売りせず、荷車に商品を積んで売り歩く曳き売りであったが、後に現在の立川町通りに店を構え、明治15年（1882）に現在地に移った。店舗は、現在地では3代目となる建物で、昭和48年（1973）に建築され、内装・外観ともに初代の生家を模した造りとなっている。

蒸籠塚

原嶋屋総本家の店舗

店舗南側にある蒸籠塚は、製造過程で使用する蒸籠の供養塚で、昭和46年（1971）に建立されたものである。

③臨江閣

建物概要はⅠ－１－（２）－⑥を参照

臨江閣は本館・茶室・別館の3棟から構成されるが、性格と規模が異なる3種の建築が並び立ったことで、皇族・貴顕紳士から一般市民まで、また文人墨客といった風流人も幅広く受け入れ、それぞれに興を尽くし楽しませてきた。元々は迎賓館として建てられた施設であるが、初代群馬県令である楫取素彦が示した「市街共有」の理念により、早くから市民に開かれた施設でもあったのである。

例えば、完成直後の明治18年（1885）に市民有志によって開催された能興行の記録が残っているように、能などの舞台芸能が行われていた。明治30年（1897）にはホトトギス系俳風の「いなのめ会」

が発足し、大正時代に入ると臨江閣での句会や庭園を散策しながら句を詠みあう「合評会」が盛んに行われていたとされる。この時代は萩原朔太郎を中心に前橋の詩壇が絶頂期を迎えていたこともあり、文芸誌「キツネノス」の同人たちや結社「幻想詩社」のメンバーらによる歌会なども開かれていた。このため当時は、前橋公園を訪れたついでに臨江閣に立ち寄るのではなく、逆に臨江閣を訪れるために前橋公園に向かうのが主流だったようである。

なお、萩原朔太郎は大正 8 年（1919）に臨江閣で結婚式を挙げているが、その当時のみならず、現在も結婚式場としての利用が散見され、近年では臨江閣を背景に日本庭園で婚礼や成人式の前撮りを行う若者が多くみられる。

臨江閣の前で婚礼写真を撮影する夫婦

戦後、臨江閣は一時的に市役所の仮庁舎となり、昭和 30 年（1955）から 26 年間は公民館（中央公民館）として様々な団体に利用された。中でも印象的なのが、「上毛かるた大会」の決勝戦で、毎年、正月明けの日曜日には、大会に出場する子供とその家族が臨江閣へ向かって行列をなすのが恒例の風景であった。現在は市の貸館として運営されており、別館 2 階の大広間は柱のない広い和室空間であるため、映画やドラマなどのロケで頻繁に利用されるほか、平成 29 年（2017）には日本将棋連盟のタイトル戦である「第 30 期竜王戦七番勝負」の第 3 局が開催された。

第 30 期竜王戦（広報まえばし
平成 29 年 10 月 1 日号より）

【花見の舞台となる街並みを構成する建造物】

④前橋城跡

Ⅰ－１－（２）－⑦を参照

⑤前橋東照宮の鳥居

前橋東照宮は、後に前橋藩主となる松平大和守家の初代・直基が、最初の領地である越前勝山にて寛永元年（1624）に創建した神社である。その後松平氏は、北は山形から南は大分まで 13 回もの移封を繰り返すことになり、東照宮もその都度移転した。幕末に前橋城が再建され松平氏が川越から帰城すると、明治 4 年（1871）に川越で造営した社殿が本市に移築された。

前橋公園に隣接する好立地にあり、藩主ゆかりの社として長らく親しまれてきたが、建物の老朽化に伴い、令和 3 年（2021）に本殿を残して建替えが行われた。境内入口にある鳥居は、明治 44 年（1911）に建立されたものである。

東照宮の鳥居

⑥旧石川橋の欄干

石川橋は広瀬川に架かる橋で、大正４年（1915）に建造された市内初の鉄筋コンクリート橋である。市道 00-018 号線（(都）県庁群大線）の拡幅に伴い、令和２年（2020）に新橋に架け替えられた。架け替えに際して、意匠は旧橋を踏襲した天然石を採用し、大正４年の刻銘が残る旧橋の親柱と欄干は原型のまま市道沿いに移設された。

旧石川橋の欄干と臨江閣

⑦るなぱあく（中央児童遊園）

昭和 29 年（1954）に周辺町村との合併を記念して開催された「前橋グランドフェア」を契機に、旧前橋城の空堀に開設した中央児童遊園を前身とする遊園地である。(出典：大前橋建設記念事業誌・同年)

１ヘクタールほどの面積の中に８種の大型遊具が設置されており、入園料が無料なうえ、各遊具の利用料金も安価であることから、「日本一安い遊園地」とされる。開設時に設置された「もくば館」と５台の「電動木馬」は、平成 19 年（2007）に国の登録有形文化財に登録された。これらは、全国の遊園地で現役稼働する木馬の中で、登録有形文化財となっている唯一のものである。

登録有形文化財の木馬

「るなぱあく」の愛称は、平成 16 年（2004）に市民公募によって付けられたものであるが、これは郷土の詩人・萩原朔太郎の詩集「遊園地にて」において、「遊園地」という言葉に「ルナパーク」とルビがふられていることに由来している。

なお、るなぱあくの敷地内には、明治から大正にかけて「波宜亭（坡宜亭)」という茶店が存在していた。店舗建物は当時県内の温泉旅館や料亭によく見られた木造 3 階建ての構造であった。学生や文化人のサロンの場として利用され、萩原朔太郎がここを舞台にした詩を書いたことでも知られるが、大正 10 年（1921)、前橋市の公園計画に伴い閉店した。

⑧縣治記念碑

大正６年（1917)、本市の人口は６万人に達し、明治元年（1868）当時の４倍となった。このような飛躍的な発展は、「県庁が置かれたからである」という歴史認識が広く共有されていたこともあり、市制施行 25 年であった同年、県庁移転に尽力した人々を称える「縣治記念碑」を前橋公園に建立した。石碑には、下村善太郎ら 25 人の名前が刻まれていることから、これを「前橋二十五人衆」と称している。

縣治記念碑

（3）歴史と伝統を反映した人々の活動と周辺の市街地環境

○前橋公園の花見～花見と焼きまんじゅう～

ア　前橋公園が名所となった背景と愛される理由

明治 17 年（1884）、群馬県令・楫取素彦は下村善太郎らの有力者を招き、次のように迎賓館の建設を提言した。

「（前略）前橋も大分発達して来た。いろいろの設備も出来ては居るが、而して将来高位の方が前橋に来られた場合に、その方々を待遇する家がまだ前橋にはない。是は前橋に取って甚だ残念に耐へられないから、それを建築したいと思っている。場所は旧お虎が淵の北方の堤上、大利根川の流れに面して遠く妙義の奇峰や、浅間の雲を眺めて風光絶佳であるから、最もよい場所だと考へる。」

群馬県令　楫取素彦

下村善太郎
（後の初代市長）

前年に、迎賓館を兼ねて建設した生糸改所を前橋大火で焼失していた経緯もあり、一同は即座に賛成し、敷地は下村が自己所有地を提供することとした。建設資金は、下村を含めて各界各層から続々と寄せられ、同年 9 月には本館、11 月には茶室が完成し、翌 18 年 3 月に落成式が行われた。楫取は、建物を「臨江閣」と命名し、建設に際して多額の醵金を受けた経緯を重んじ、それぞれの棟札に「市街共有」の文字を記した。

臨江閣が建設された場所は、幕末に再築された前橋城内の北端に当たり、酒井氏が藩主の時代には利根川が流れ込む入江の「虎が淵」と呼ばれ、利根川の流路が変わってからは「空堀」として使用されていた低地帯の北側の小高い土手の上であった。明治に入り、この辺り一帯は下村が所有していたが、「県都前橋の飛躍のためならば」と敷地の活用に賛同したのだという。

こうして臨江閣は、近代前橋発展の立役者であった楫取と下村の連携によって誕生した。その威風堂々とした佇まいは、虎が淵北方の「風光絶佳」な眺めや、県都前橋誕生の足掛かりとなった再築前橋城の遺構と調和して見事な景観を形成し、臨江閣の誕生秘話も相まって辺り一帯は市民にとって特別な場所・憧れの地となった。

後年、臨江閣や前橋公園が持つ求心力は、萩原朔太郎をはじめとする多くの文化人を引き寄せ、この地で親交を深めたことがさまざまな文献に残されている。例えば、草野心平は、「わが青春の記」（昭和 40 年（1965））で、臨江閣からの眺めや前橋公園について次のように言及している。

「上州という言葉のもつ音感がまず私をひきつけた。（中略）赤城、榛名、荒船、そして浅間、初めて見る上州の風景は見事だった。旅ではなく、私は前橋に住もうと咄嗟に決めた。（中略）前橋公園には歩いて二分位のところだった。しばらくの間は、毎日一回、公園の鉄棒にぶらさがるのが私の日課になった。」

また、前橋城址や臨江閣を含む一帯は、明治 38 年（1905）に前橋公園となる以前から「地域の趣を代表する景勝」として選出されており、古くから前橋一の名所であったことを示すとともに、「臨江閣」・「桜」・「城址」などが組み合わせで紹介されていることが多く、これらをまとめて巡るのが、現代にも続く前橋公園の楽しみ方であることが分かる。

・明治 20 年（1887）前橋市街十景
神明社夜雨・**敷島碩帰雁**・岩神之飛巖・双子山秋月・八幡社雪景・**臨江閣夕涼**・楽水園聴蟲・是字寺晩鐘・**公園堤櫻花**・利根川双橋
・明治 24 年（1891）前橋十景
岩神奇岩・楽水園聴虫・二子山秋月・神明社夜雨・是字寺晩鐘・**公園桜花**・**臨江閣晩涼**・**敷島帰雁**・八幡社雪・刀根双橋
・大正 10 年（1921）前橋二十名勝
前橋公園・**前橋城址**・縣社八幡宮・龍海院・利刈牧・一里の渡・比刀根川・天野藤園・二子山古墳・富士山古墳・小出川原公園・岩神飛石・風呂川・梅の井・妙安寺・大渡・**虎が淵**・**敷島河原**・橋林寺・文筥柳
・大正 13 年（1924）前橋八景
天川堤櫻花・利根川双橋・是字寺晩鐘・**臨江閣夕涼**・岩神の飛石・双子山秋月・八幡宮暮雪・神明社夜雨
・昭和 11 年（1936）前橋八景
厩橋城址・**お虎ヶ淵**・お艶が岩・岩神の飛石・龍海院・群馬会館前・一里の渡・比刀根橋・二子山の夕月
・昭和 31 年（1956）前橋観光十景
敷島公園・広瀬川の遊歩道・天川大島の松並木・群馬大橋・萩原朔太郎の碑・**児童遊園**・総社の明神様・綜合グランド・**臨江閣**・市庁舎屋上より赤城山を見る
※「敷島碩」・「敷島」・「敷島河原」は、大正 11 年（1922）に敷島公園（敷島町）を開設するまで、前橋公園西側に広がる利根川河川敷（現在の前橋公園の親水・水上ステージゾーン）の呼称であった

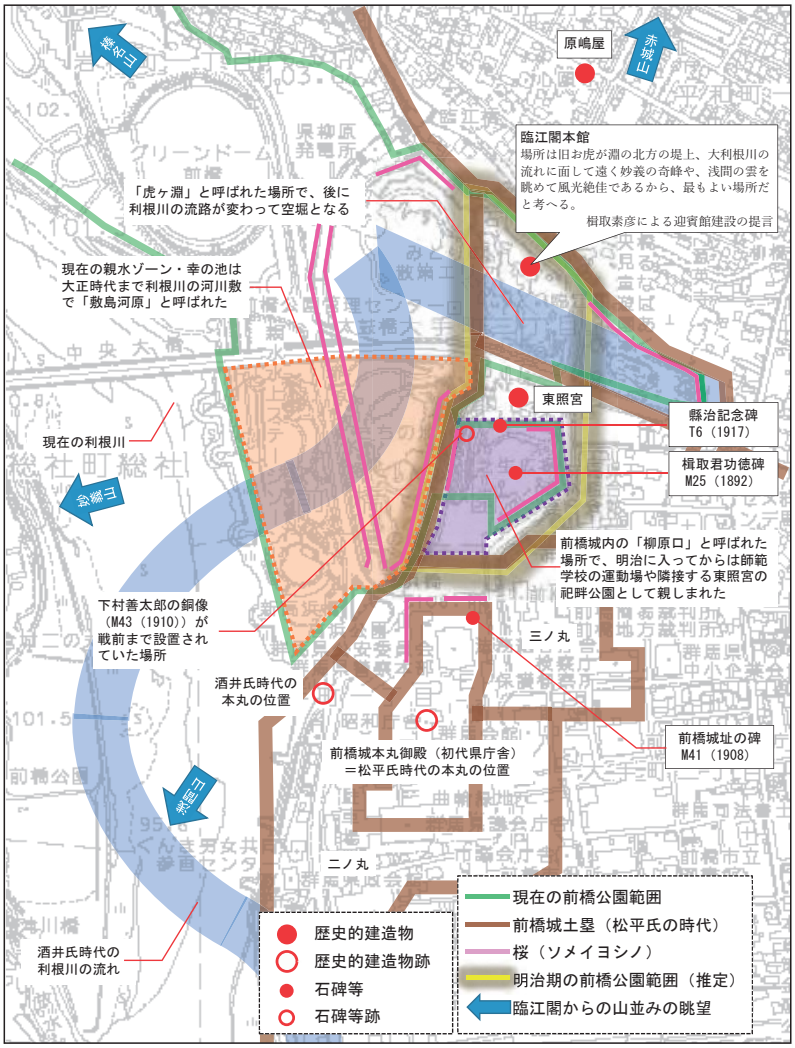
さらに、前橋公園では歴史の節目でさまざまな行事や式典が行われており、市民にとっての「特別感」がますます重みを増していったと推察される。

・明治 43 年（1910）一府十四県連合共進会の祝宴の開催
・大正　6 年（1917）市制施行 25 周年記念「縣治（けんも）記念碑」の建立
・昭和 14 年（1939）隣接する厩橋招魂社（うまやばししょうこんしゃ）が護国神社となる
・昭和 29 年（1954）周辺町村との合併記念「前橋グランドフェア」の開催

昭和 11 年（1936）には、『前橋観光案内』にて前橋公園が次のように紹介されており、公園の桜や景色、銅像や石碑を巡る散策は、他都市からの誘客が期待されるレジャー（行楽）であったことを示している。

春は花、夏は涼み、秋の夕陽に、冬の雪景色総面積一万二千五百坪余ります。堤上に桜樹茂り、下は坂東太郎と云はれる利根の清流、西岸は見渡す限りの沃野（よくや）の彼方に典雅の榛名、噴煙の浅間、さては奇形妙義の山々、東北には赤城の雄大に日光の連邦を望み、園内には初代市長故下村翁の銅像、西南戦役以来の本市出身戦病没勇士の英霊を祀る招魂社、金鵄（きんし）の武勲を讃へる勇士の彰忠碑あり、花壇に遊園に、水泳場の施設もあり、四季散策の人が絶えません。（漢字は常用に変換）

このように、前橋公園は古くから前橋一の名所であったことに加え、市民にとって特別な場所でもあることから、現在も多くの市民に愛され、多くの人が出かける行楽地となっているのである。



イ　前橋公園の花見の歴史

本市では明治 25 年（1892）4 月 1 日に市制施行となり、初代市長には下村善太郎が就任した。4 月 10 日には、下村がかねてより計画していた楫取前県令の功績を称えるための「前群馬県令楫取君功徳碑（以下、功徳碑）」の建碑式が挙行された。碑文の書き出しはこのように記されている。

今元老院議官、楫取君之令于群馬県也、勤倹以下泣下、忠誠以奉上、休養民力、宣布徳教、風移俗易、君已去、而士民翕然、謳唫弗已、（以下略）
（今の元老院議官楫取君の群馬県に令たるや、勤倹以て下に泣み、忠誠以て上に奉じ、民力を休養し、徳教を宣布し、風移り俗易はる。君已に去るも、而るに士民翕然として謳唫すること已まず。）

前群馬県令楫取君功徳碑

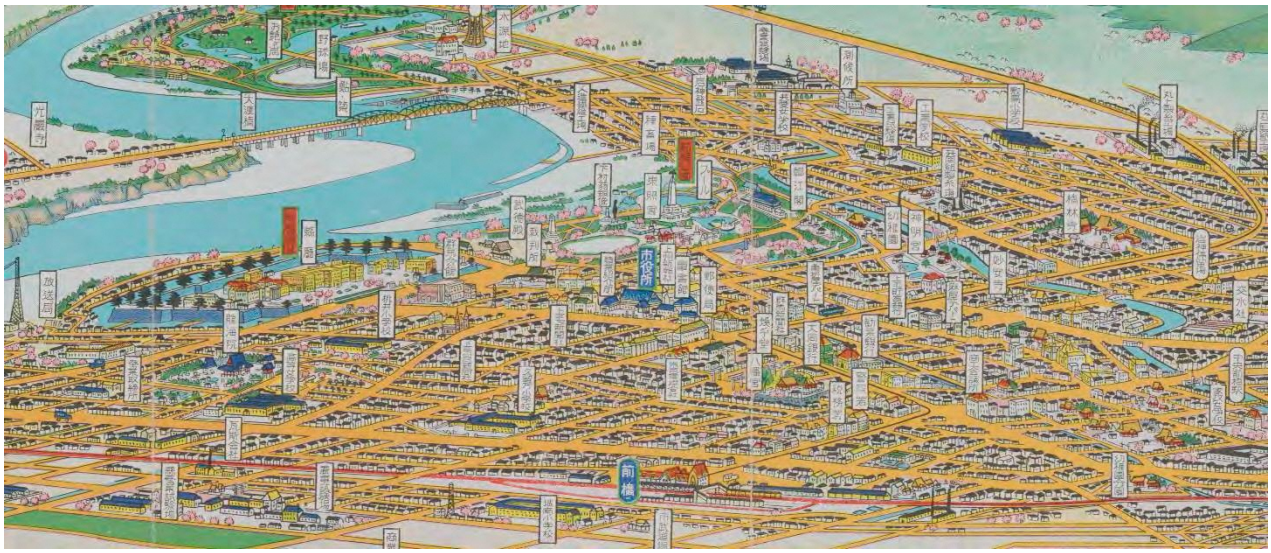
ここには、楫取の県令としての政治姿勢（基本方針）がうたわれており、楫取が「勤倹」や「民力休養」を重視したことが分かる。民力休養とは、一般的には国民の税負担を軽減し、生活の安定を図るべきとする主張と解される。より広い意味では、余暇の過ごし方や心のゆとりなどを含めた市民生活の豊かさを求める考え方であるともいえた。こうした背景もあり、楫取の政治姿勢を引き継いだ下村は、功徳碑の周辺一帯が「憩いの地になるように」との願いを込めて、市制施行の記念に桜を植樹した。これが、近代都市装置としての前橋公園設立の第一着手であり、現在も多くの来客でにぎわう「前橋公園の花見」のルーツである。なお、明治 24 年（1891）の「前橋繁昌記」によれば、以前からこの辺り一帯は花見の名所であったとされているが、下村の植樹によって確たる名所となったようである。

旧前橋城土塁の桜
上：朔太郎撮影「前橋公園堤の桜」
下：現在の様子

下村は植樹の翌年に他界しており、花見客でにぎわう前橋公園の姿を見ることは叶わなかったが、市民らの寄付によって「故下村翁銅像」が明治 43 年（1910）に公園を一望できる堤の上に建てられ、昭和 18 年（1943）に戦時資材として供出されるまで前橋公園を見守り続けた（現在は前橋市役所前に再建され、来庁する市民を見守る形になっている）。

下村の銅像が建立される 2 年前の明治 41 年（1908）には、県都前橋誕生の契機となった前橋城再築・前橋藩再興を果たした最後の藩主・松平直克の功績を称える「前橋城址の碑」が前橋公園から約 80m 南の本丸土塁の上に建立され、大正 6 年（1917）には県庁誘致に尽力した人々を称える「縣治記念碑」が東照宮南に設置された。

これにより、松平直克を称える前橋城址の碑、楫取素彦を称える功徳碑、下村善太郎を称える銅像、前橋二十五人衆を称える縣治記念碑が前橋公園一帯に設置されたことになり、年に一度、前橋公園で花見をするということは、前橋の発展（復興）の契機となった彼らの功績を称えるとともに、後世にその気概を脈々と引き継いでいくことを意味するものとなった。



昭和９年（1934）（推定）の鳥瞰図　出典：吉田初三郎地図（国際日本文化研究センター）
中央上の東照宮の左隣に下村翁銅像が見える

このように前橋公園での花見は、市民にとっては特別な意味を含むものであったが、例えば、大正３年（1914）には、萩原朔太郎と親交の深かった室生犀星が、詩「前橋公園」で桜の様子を描写しており、前橋公園や桜の歴史的背景を知らずとも、目を引くものであったようである。

土手上にある臨江閣は花見をしている場所からもよく見える

すゐすゐたる櫻なり　伸びて四月をゆめむ櫻なり　すべては水のひゝきなり　四阿屋の枯れ芝はすこし哀しかれども　花ぞのになんの種子ならしてしきりに芽吹き　きそよりもなほ萌えづるげ（以下略）

また、大正５年（1916）４月 10 日の上毛新聞には、「工女連の観桜」の見出し記事が掲載されており、本市が「生糸のまち」最盛期であった頃には、製糸工場で働く女性たちにとっても前橋公園での花見は大変な楽しみであり、前橋公園を訪れ、臨江閣にも立ち寄るという、今と変わらぬ楽しみ方をしていた様子が描かれている。

「向町共同組合にては、約九百人工場門前に集合して列を整へ、向町通りを南に折れ柳橋を渡り市公園に入り、二三分咲の桜樹の下に嬉戯して自由の身に帰り、夫より臨江閣別館に集りて午前中は義太夫、午後は芸妓連の手踊あり、一日の歓を盡して各工場に帰るは七時半頃ならん。（中略、句読点追加）」

現在は広い範囲に桜が植樹されている

戦後、桜はさらに植樹されて県警本部北側の土塁周辺や利根川への放水路沿いまで広がり、現在では公園を訪れた花見客はもとより、近隣を通行する者の目も楽しませてくれる市内屈指の花見スポットとなっている。

ウ　焼きまんじゅうの歴史

平野部の広範囲で古くから米麦の二毛作が行われてきた群馬県では、米に代わり地粉（地元産の小麦粉）でうどん・餅・饅頭などの「粉もの」をつくり、食してきた歴史がある。群馬ではこれを「粉食（こなしょく）文化」と呼ぶ。中でも焼きまんじゅうは、他都市ではみられない形状の粉もので、県内では広く食されてきた習慣があり、現在では群馬を代表する郷土食として知られる。

その起源には諸説あるが、市内では原嶋屋初代・類蔵が売り始めたものが創始であるとみられており、明治 31 年（1898）の「前橋案内」や大正 3 年（1914）の「郷土研究」に複数の記述があることから、少なくともこの時代には郷土食として認識されていたことが分かっている。

3 代目・熊蔵（くまぞう）が記した「焼まんじゅうあれこれ」（昭和 44 年（1969））によれば、初代の類蔵は、ふかした里芋を竹串に刺し味噌を塗って焼いた「芋串」にヒントを得て、これをまんじゅうに置き換えたものを開発した。当初は、芋串と同様に味噌を塗って焼くだけのものであったが、黒砂糖を入れた甘辛味噌にしたところ大変な好評であったため、この味に定着したのだという。

【焼きまんじゅうの製造工程】

①種づくり（もち米を煮て木製容器に移し、麹をまぶしてしばらく寝かせる）

②捏ね（種・小麦粉・水を捏ね、捏ねた生地を小分けにする）

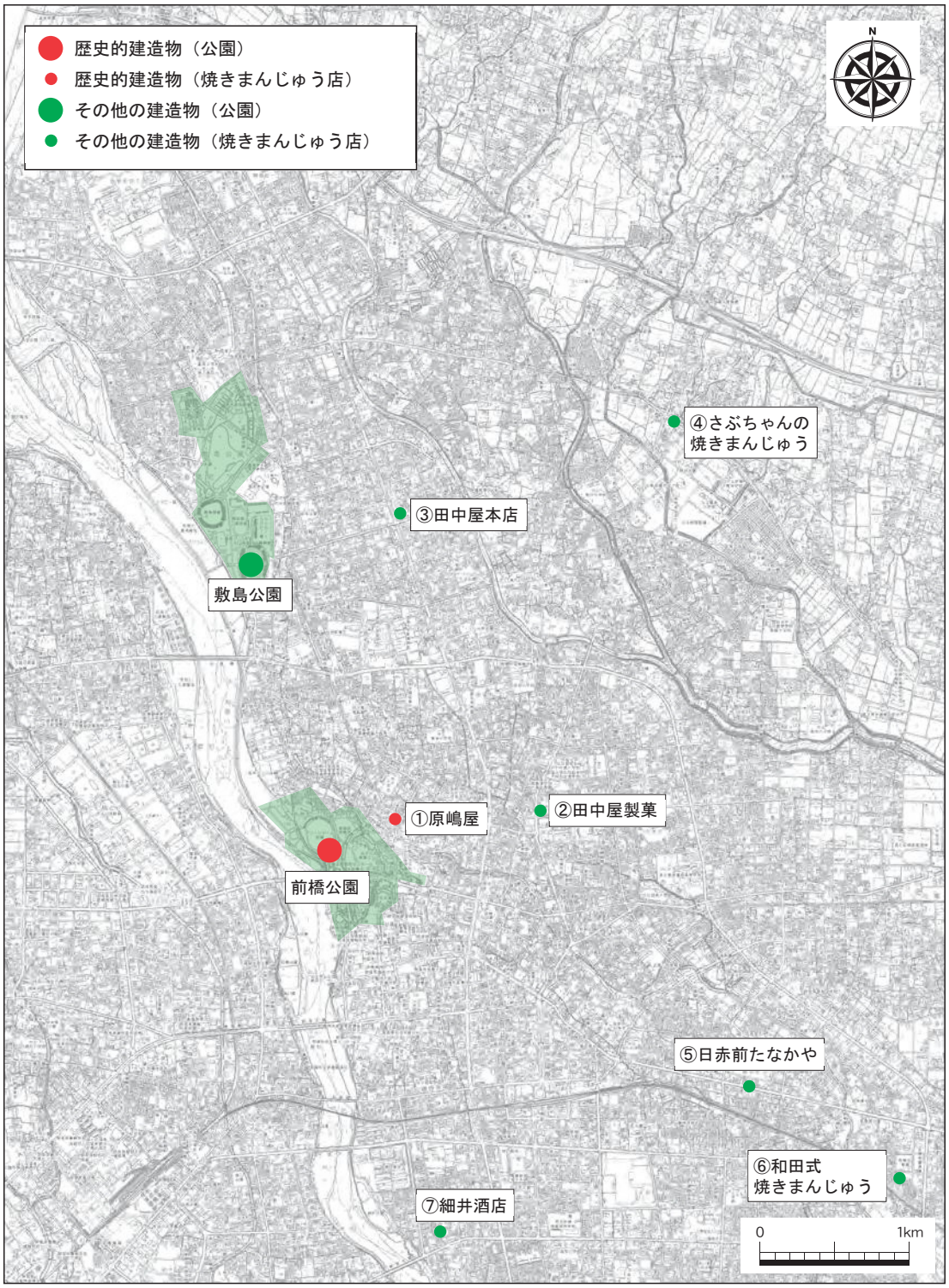
③ふかし（蒸籠に並べてしばらく寝かせてからふかし、生地を取り出して別の蒸籠に移す）

④分類・串刺し（生地を切り離して形を選別、４つで一串にひとつひとつ手で竹串に刺す）

⑤焼き（焼く前に赤味噌・ザラメ・水アメの「味噌だれ」をつけ、さらにたれを塗り重ねながら７～８分焼く）

現在、県内で見られる焼きまんじゅうのほとんどは、「味噌だれを塗って焼いたもの」であることから、原嶋屋と同様の製法が時間をかけて拡散していったものと推察される。市内では、昭和後期あたりまで焼きまんじゅうを提供する店があちこちにあり、往時に比べれば少なくなったものの中心市街地近郊には現在も多くの焼きまんじゅう店が存在する。また、前橋公園や敷島公園など、市内の行楽地の近隣には、創業 100 年超の老舗があるのも特徴的である。

No.	店舗名／所在地	創業年	No.	店舗名／所在地	創業年
①	原嶋屋総本家 平和町 2-5-20	安政 4 年（1857）	⑤	日赤前たなかや 朝日町 3-12-7	昭和 10 年（1935）
②	田中屋製菓 若宮町 1-7-4	大正 13 年（1924）	⑥	和田式焼きまんじゅう 天川大島町 1-35-9	平成 17 年（2005）
③	田中屋本店 下小出町 3-2-1	不明（100 年超）	⑦	細井酒店 南町 2-34-10	平成 21 年（2009）
④	さぶちゃんの焼きまんじゅう 上細井町 1922-1	平成 22 年（2010）			



なお、焼きまんじゅうと同様に愛されたもう一つの郷土食として「片原饅頭」があった。片原饅頭は、本市で「福祉の祖」と称される実業家・宮内文作が明治 2（1869）年から売り出し始めた酒饅頭で、前橋繁昌記をはじめ様々な文献に登場する。一時は焼きまんじゅうよりも人気を博し、萩原朔太郎や幼少期を前橋で過ごした鈴木貫太郎（第 42 代内閣総理大臣）が、おやつとして好んで食した記録も残る。160 年を超える老舗として営業を続けたが、平成 8 年（1996）に惜しまれながらも閉店、地元の実業家が平成 22 年（2010）に復元に成功し営業を再開するも、令和 2 年（2020）に再度閉店し、再開の目途はたっていない。

片原饅頭（復元）

エ　花見と焼きまんじゅう

前出の「焼まんじゅうあれこれ」には、「あちらこちらで縁日の多い上州では、その出店には必ずといっていいほど、焼きまんじゅう屋が目につく」との記述がある。実際に、本市の四大年中行事である「初市まつり」、「七夕まつり」、「花火大会」、「前橋まつり」では、焼きまんじゅうの露店が散見されることから、その傾向は現在も続いていることが分かる。とりわけ前橋一の名所にして古くから市内随一の行楽である前橋公園の花見では、開花の前後 1 か月程度、園内でさまざまな露店が商うが、その中には必ず「焼きまんじゅう」の暖簾やのぼり旗が見られる。また、前橋公園から程近く、市内一の老舗である原嶋屋総本家の店主によれば、花見の時期は一番の稼ぎ時で、皆こぞって焼きまんじゅうを持って前橋公園へ向かい、芝生の上で広げて食べるのだという。

焼きまんじゅうの露店

明治 24 年（1891）の前橋繁昌記には、「此の図は前橋の名物として人口（じんこう）に膾炙（かいしゃ）する味噌つけ饅頭なり（漢字は常用に変換）」とあり、当時はまだ焼きまんじゅうではなく「味噌つけ饅頭」と呼ばれていたようであるが、原嶋屋はこの時点ですでに現在地で商売をしており、翌年には下村善太郎が前橋公園一帯に桜を植樹していることから、「花見のお供に焼きまんじゅう」の風習はこの辺りから始まったものと推察される。

明治時代の様子（前橋繁昌記）
国立国会図書館 WEB サイトより

現在の店頭販売の様子

その後、明治 40 年（1907）の前橋繁昌記では、「往時は市内至る所に於（おい）て販（ひさ）ぎたる由（よし）なれども昨今にては僅かに紋日物日（もんびものび）の露店に名物の味噌の香（か）を止（とど）むるのみ。」とあり、名物としてはやや下火になった様子が覗えるが、上毛新聞社の記者であった坂梨春水（さかなししゅんすい）が大正 3 年（1914）に記した「郷土研究」には、「東照宮祠前（ほこらまえ）の御蔭石（みかげいし）の大鳥居に初春の光てりはえて、（中略）人口門の休憩茶屋ののれんを肩で切れば、味噌饅頭焼く角火鉢の傍に座せる美人の声もあやしく『いらっしゃい』赤い毛布を敷いた縁台に腰を掛けて、早速お馴染

の焼饅頭をといいつける。」とあり、この頃も変わらず前橋の名物であったことと、前橋公園に隣接する東照宮境内の茶屋で焼きまんじゅうが提供されていた様子が描かれている。

さらに、昭和 27 年（1952）6 月 10 日の上毛新聞の「茂木近之助記」には、「“花よりだんご”と云うことわざがあるが、春の花見には必ずこの味噌付饅頭の店が幾軒も出た。（中略）筆者の学生時代にはこの焼まんじゅうが、唯一の嗜好物であった。スポンヂと称し、現存している前橋公園の茶店に入って『おぢさん一本焼いておくれ』友人数名と共に毎日の様に通ったものである。」との記述があり、花見の時期の前橋公園には焼きまんじゅうの露店が多数出店し、花見の時期以外にも園内の茶店で焼きまんじゅうが提供されていたことが記されている。

大河ドラマ「花燃ゆ」
放映時の園内の茶店

また、同じ茂木記の中には、「当時長い串に直径□吋（インチ）位のまんじゅうが四ヶ付けてあり、それを炭火で焼いて味噌をつけ又それを焼いて食べるのだが、その焼く香（にお）いが飽くなく食欲を需（もと）めて止まぬ学生時代の大きな魅力だった。この製造元とも云うべきは向町の原島屋（現在の原嶋屋のこと）で、ここのは一串五ヶついていたので、学生は各方面からここに集って、この焼まんじゅうをほお張り文学を論じ、恋をささやきあいながら若き日の思い出を残したものだ。」とあり、前橋公園の茶店周辺に漂う味噌だれの香りが強く印象に残っていることや、原嶋屋が焼きまんじゅうの元祖であると認識されていた様子を知ることができる。

これらの手がかりから分かるのは、花見の時期の前橋公園には多数の焼きまんじゅう屋が出店していたこと、かつては園内の茶店や茶屋でも焼きまんじゅうが提供されていたこと、味噌だれの香りが焼きまんじゅうの象徴だということである。また、焼きまんじゅうは市民にとって、古くから「行楽のお供」であり、焼きまんじゅうを頬張りながら桜を楽しむのが、他都市では見られない前橋公園での「花見の流儀」であることが分かる。

現在、園内で焼きまんじゅうを常時提供している売店はなく、イベント時にキッチンカー事業者等が提供する程度であるが、原嶋屋の店主の話では、花見の時期には今でも複数の焼きまんじゅう屋が出店し、原嶋屋でもその時期が一番混雑するのだ

という。最近では花見の時期に限らず、臨江閣やるなばあくを訪れた前後に原嶋屋に立ち寄る人々も多く、群馬の郷土食として知られる存在になってからは県外からの来客も多いとのことである。

原嶋屋から前橋公園方面を見渡すと、広瀬川にかかる石川橋を手前に見て、風呂川沿いの老松樹林の向こうに臨江閣が見える。沿道には、焼きまんじゅうの袋を持って歩く人々の姿があり、風格ある店舗建物の周辺には味噌だれの甘い香りが漂っている。

原嶋屋方面から見た前橋公園方向の景色

（4）まとめ

前橋公園周辺はかつて「関東の華」と言われた前橋城があった場所に位置しており、都市化が進んだ本市の中心市街地において、未だ歴史情緒を色濃く残す空間である。

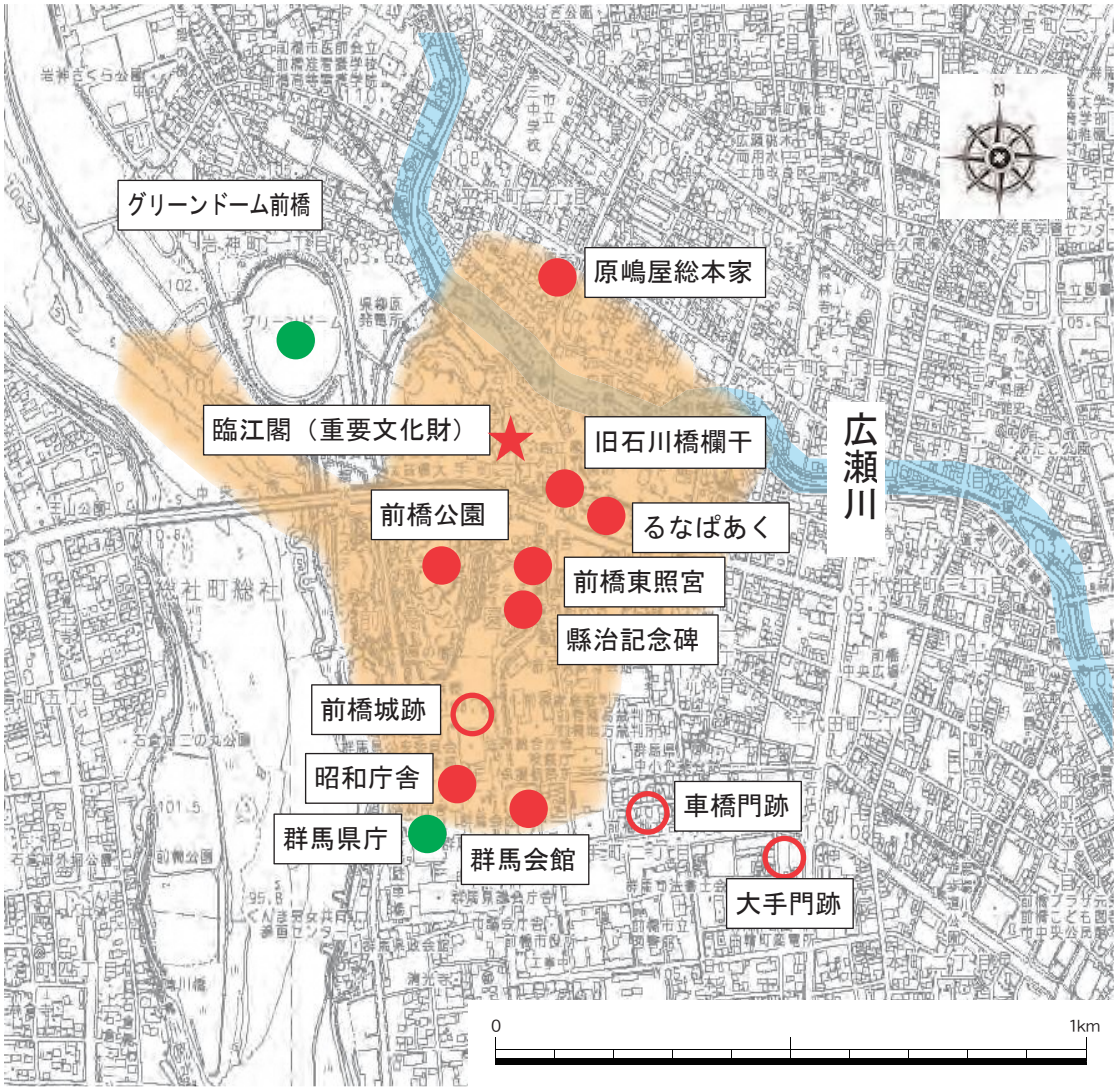
古くから景勝地として知られる前橋公園だが、初代群馬県令・楫取素彦の「民力休養」という政治姿勢を引き継ぎ、明治 25 年（1892）に初代市長に就任した下村善太郎が桜の植樹を行ったことをきっかけに、桜の名所として広く親しまれることとなった。

前橋公園の花見のお供としては「焼きまんじゅう」が定番となっていて、今も周辺の店舗や園内の露店で購入した焼きまんじゅうを片手に花見を楽しむ人々の姿を見ることができ、前橋らしさが感じられる。

古くには、萩原朔太郎や室生犀星をはじめとする文化人や、「生糸のまち」を支えた工女たちが好んで前橋公園を訪れ、花見を楽しんでいた記録が残っているが、こうした歴史を紐解くと、これまで何気なく行われてきた「焼きまんじゅうを食べながら前橋公園で花見を楽しむ」という情景は、明治時代から続く伝統と言っても過言ではない。

これらを歴史的風致として再認識し、国の重要文化財に指定された臨江閣を中核に、前橋公園を含む周辺エリアの歴史情緒の維持に努めるとともに、行楽地としての魅力とアクセス性の向上を図ることが重要である。

Ⅰ - 2　前橋公園の花見にみる歴史的風致の広がり



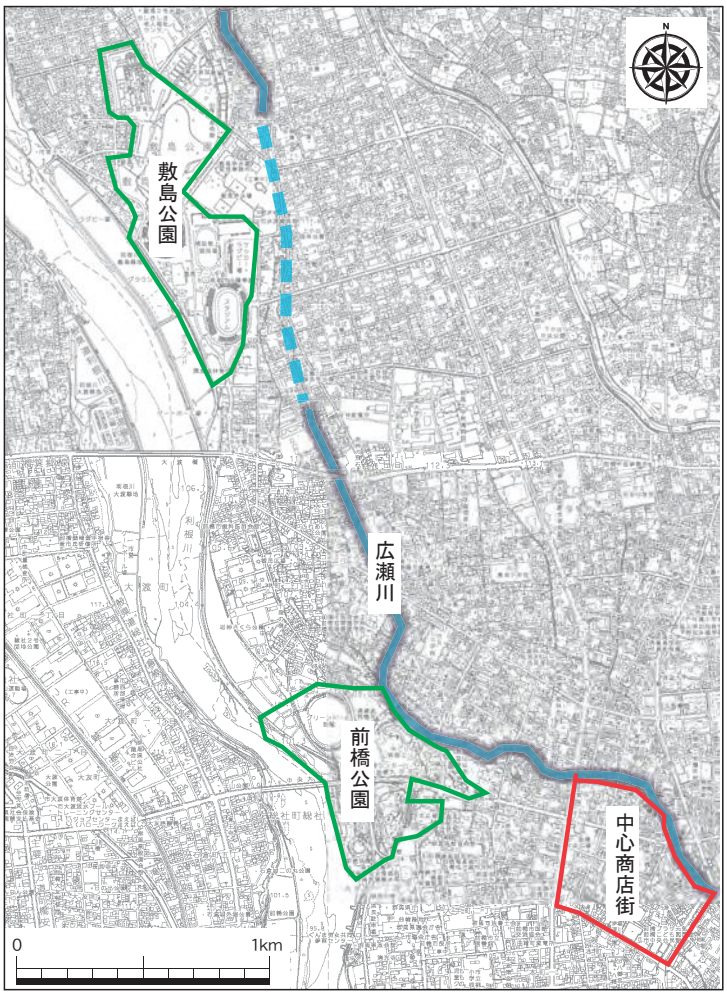
凡例

- 前橋公園の花見にみる歴史的風致の範囲
- 重要文化財
- 歴史的建造物
- 歴史的建造物跡
- その他の建造物

【歴まちコラム・敷島公園】

前橋公園開設から 17 年後の大正 11 年（1922）、本市にもう一つの近代都市公園が開設された。それが敷島公園（敷島町）である。

この公園は元来「小出河原」または「郊外公園」と称された場所で、官有地の払い下げにより整備された。公園名は一般市民からの懸賞募集により付けられたもので、応募者 1,167 人中 334 人の多数をもって「敷島公園」と決定した。



敷島公園は利根の清流に面し、上毛三山を一望できる好立地にあることに加え、2,600 本にも及ぶ青松林が広がっており、風光明媚な新名所として期待された。そうした折、昭和 5 年（1930）から始まった昭和恐慌により、本市の基幹産業であった蚕糸業が壊滅的な打撃を受け、本市は製糸都市から観光都市への方向転換を図ることとなった。その方策の一つが、敷島公園の観光地化であった。

観光地化の手段は、敷島公園を「百花繚乱四季たえざる花によって誘客」するというもので、市民に花木の寄付を呼びかけ、昭和 11 年（1936）から翌年にかけて桜・菖蒲・つつじ・ぼけ・山紅葉を植樹。さらに、昭和 46 年（1971）には 200 種類・2000 本ものバラが咲く「敷島公園ばら園」も開設されている。

園内には、昭和 7 年（1932）の野球場建設を皮切りに次々と運動施設が建設されたこともあり、現在では四季を通じた行楽のほか、スポーツの拠点としても親しまれる。また、公園を観光地化する過程で行われた植樹によって、園内はもとより、園周の道路沿いなどの広い範囲にも桜が植樹されたため、都市部では前橋公園に並ぶ花見の名所となっている。さらに、前橋公園と同様に、園の近隣には老舗焼きまんじゅう店が数軒あり、「花見のお供に焼きまんじゅう」の光景は敷島公園でも見ることができる。

なお、公園の東には街なかへと至る広瀬川が流れており、広瀬川を介して敷島公園・前橋公園・中心商店街がつながるため、その回遊観光のあり方が模索されている。